

土浦中学から土浦一高へ1 ～終戦直後の真鍋台～

8月15日の正午、学徒たちは動員先や学校或いは自宅で、玉音放送を拝聴し、長い戦いの日々が終わりました。今号から、戦後の土浦中学から土浦一高への歩みを『進修百年』、屋口正一(中48・高1回)著『櫻水物語 戦中派の中學時代』・『続・櫻水物語 終戦直後の中学生生活』・『櫻水物語(三) 土浦一高元年』などから辿ってみます。
引用文中の【 】内は筆者による注記です。

1945年8月15日

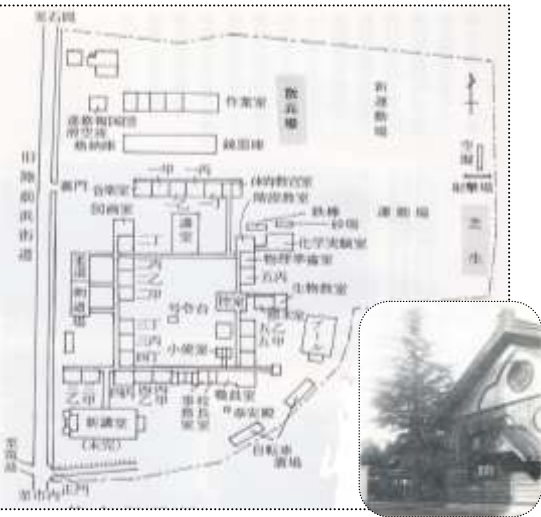
8月15日正午、終戦に係る勅語の放送(玉音放送)がありました。その日の土浦中学の教務日誌には、次のように記されています。

- 一、午前五時半、空襲警報発令セラレ、九時解除。
- 一、正午ヨリ、御親詔ノ御放送アリ。職員生徒謹ンデ拝聴、其後学校長訓話アリ。
- 一、午後一時半ヨリ、職員常会。

その時の学校の様子を、当時本校英語科教諭であった小沢永次郎(中33回)は、『進修同窓会報』第26号(1980(昭和55)年12月発行)に「終戦直後の思い出」と題して、次のように述べています。

「午前中から、正午に重大放送がある、とラジオは予報していたが、われわれ在校生していた職員・生徒【1年生、2年生以上は第一海軍航空廠などに勤労働員中であつた。】は、玄關後のラジオのあるところに集まつた。正午になると、例の『耐へ難キヲ堪へ、忍ヒ難キヲ忍ビ以テ万世ノ爲ニ太平ヲ開カント欲ス。』の天皇の放送があつたが、これを我々と一緒に聞いていた校長は、不思議そうな面持ちで、『何のことだか判らない。』とぼやいて校長室へ入つて行かれた。その直後ラジオは、天皇放送の解説があつたので、降伏を受諾したことがわかつた。誰もが一応は精神が張りつめていたので、この放送を聞いて肩を落とし、力の抜けた様子は否めなかつた。」

1943(昭和18)年当時の校舎配置図(左)「控室」外観と中庭に現存する檜(左下)(いずれも「櫻水物語」より)



また、第一海軍航空廠に動員中であつた中45回高橋邦男(1945年3月、4年修了で繰り上げ卒業となつて)は、動員は継続されていた。飛行機部所属は、『戦いのなかの青春』に次のように記しています。
「戦局が厳しくなつてきた七月初旬、零戦脚部修理班は、工場疎開のため、荒川沖【駅】東側の民家に、工場を移して作業をすることになった。」

駅より近いため、通勤には便利となつた。しかし、運命の八月一日を迎えることになった。当日正午に、玉音放送があるから、中庭に集合するよう、指示があつた。

三〇人位いた工場関係者が集まつて、玉音放送を聞いたが、当時のラジオは雑音がひどく、最後部にいた我々は、正直いつて何の話か、内容が全然解らなかつた。『戦局が不利なので、国民は全力を挙げて、戦争に対処すべし』と、勝手に解釈していた。

ただ、最前列にいた技術将校が、青い顔をしながら『チキシヨウ!』と叫んだのを覚えてる。やがて班長から、戦争は負けて終わったと聞かされたが、実感が湧いて来なかつた。負けたと実感が湧いてきたのは、自宅に帰つて、家族が泣いていたので解つた。」

同じく第一海軍航空廠に動員中であつた茨城県立麻生中学校の生徒を引率して来ていた教員の、隊長(校長)への報告日誌には、

七月二九日在籍者八九名。

八月一日(水)【入廠以来】三八九日

正午、天皇陛下におかせられては、御自ら御放送、時局收拾に関する詔書拝聴。皆泣く。

八月二一日(火)三九五日

一同涙にて【麻生へ】引上ぐ。と記されています。

学校再開

終戦にはなりましたが、学徒たちは動員先に通いました。

「二六日一空廠【第一海軍航空廠】内は落ち着かなかつた。午近く味方戦闘機が低空で飛来、降下をくり返してはガリ版刷りのピラを空から散布した。工具も学徒もそれを拾つては二人三人と集つて読み返した。【一空廠飛行機部作業係】安田組学徒もこの日は本廠へ行き、小型組立工場

の万力台の上にピラをひろげた。一五日午近く警戒警報解除後、連日の空襲は忘れた様に止み、仕事の指示もないまま一日が暮れた。」(『櫻水物語』)

学徒たちは、作業もないのに通勤していましたが、8月18日に女子学徒と女子挺身隊員の一空廠退廠式が、慌ただしく挙行されました。更に8月20日には、男子学徒と女子工員の退廠式が行われ、一空廠に出動していた本校2年生以上の生徒たちも、式に臨みました。式後、土中生は第二工員宿舎前で物資の特配を受け、一空廠生活と別れを告げ、入寮者は実家へ戻りました。

翌21日には、全校生徒が登校。中庭に集合すると、学校から「2年生以上の動員生徒は、8月22日から31日まで休業。1年生は、馬鈴薯の植え付け準備、堆肥製造、除草、馬鈴薯植え付け、里芋堆肥。」との指示を受けました。あらゆる物資が不足し、とりわけ食糧不足が、一番深刻な問題でした。

9月1日には、全校生徒が登校し、始業式が行われました。5年生であるはずの中45回生が、4年修了で繰り上げ卒業していたために、4年生(中46・47回)が最上級生となつていました。

その日の学校の様子を、屋口正一は、「永い戦いと共に夏も終わった。ほぼ半歳振りに母校へ登校した時、校舎周辺には多数の防空壕が目立ち、建舞【上棟式】はしたものの資材不足で骨組みだけだった新講堂は、屋根と応急の外壁を張つて、学校工場となり万力台が並んでゐた。博物教室と物理教室との間の控室も又工場化し、木製架台の上に「天風」(空冷星形三〇〇馬力)発動機数台が置かれてゐた。教室に天井はなく【焼夷弾が引掛り延焼する虞があるとして、撤去されていた】、坐るに椅子足らず、学ぶに本なし、の状態であつた。戦災校の青空教室に比べれば恵まれてゐたが、教室の座席に坐りきれず生徒は廊下迄あふれた。」

と記しています。(『続・桜水物語』)

疎開をして来た生徒たちで生徒数が急増していました。9月25日現在、定員1000名(1学年は4クラスで各50名に対して、全校生徒数は1405名(1年生から4年生まで)に達していました。止むなく、授業は、机・椅子作りから始まりました。生徒たちは各家庭から鋸・金鋸・鉋の類を持参し、加えて、全校生徒が釘を1人3本あて寄付する形で持ち寄り、桜川北岸にあった木工場へ連日通いました。1・2年生が材木を運び、野尻先生の指導で3年生が作り、出来た机と椅子とを4年生が、旧国道6号経由で真鍋坂を運び上げました。

何とか机・椅子は用意できましたが、教科書がありません。4月の進級時に1冊の教科書も買ってなかったのです(売ってなかった)。そこで、授業は取り敢えず、前学年の教科書を使つての学習から始まりました。動員や勤労奉仕で未修部分が残っていたのです。更に、敗戦で、内容に問題を抱えた教科書への、いわゆる「墨塗り」も行われました。漸く発行された戦後版教科書は、製本されたものではなく、分冊(表紙とも32頁)、印刷し放しの新聞2頁大を、綴じずに折り畳んだだけのものでした。しかも、それすら、当初は全員に行き渡る数はありません。

不十分なながら、机や教科書は用意されましたが、完全な授業再開とはなりません。その後の教務日誌に、
赤池(注)【付近の約1ヘクタールの松林跡の】開墾実施見聞。開墾開始につき生徒は万能・唐鍬・鍬・シャベル用意。
暴風のため開墾中止、授業を行う。
1・3年生午前中開墾、2・4年生午後開墾。

雨天のため授業。
などとなるように、食糧増産のための開墾作業が行われ、晴耕雨読の学校生活となっていました。

10月に入ると漸く授業が中心になってきました。生徒増は続いていました(定

員1000名に対し、1945年9月25日現在1405名、翌年5月20日1717名、同年9月9日1638名であった。)

この数値は、疎開転入生で生徒数が定員を遙かに超えたことに加え、敗戦により、満州や朝鮮などの外地から引き揚げて来た生徒の編入によるものでした。更に、復員学徒も転入してきました。在校生の歓呼の声に送られて、勇躍入校入隊した海軍兵学校・海軍経理学校・陸軍士官学校・陸軍幼年学校・各種少年兵学校に在籍していた生徒の外、海軍甲種予科練習生、乙種予科練習生、陸軍特別幹部候補生などが、「陸海軍諸学校在学者ノ編入学ニ関スル件(文部次官発地方長官宛通牒、1945年9月5日)」により、入学前の学歴と修了年次に応じて、相当学年に転入学してきたのです。この中には、本校出身者のみならず他校出身者も含まれ、共に机を並べることにになりました(編入生徒数は、1943年95名、1944年136名、1945年521名、1946年178名、1947年47名であった)。そのため、服装は、陸海軍の軍服から隣組配給の陸軍兵用上衣や詰襟継ぎ接ぎの古い学生服まで、様々且つ雑多でした。帽子は、戦中には戦闘帽が制帽でしたが、終戦で出回った海軍略帽の錨章を外し桜水章に代えたものが普及していました。それは格好良かったのですが、物資が出回り始めると戦前型の学帽に代わっていききました。

11月2日に「陸軍現役将校配属令」が、5日に「陸軍現役将校配属施行規程」が、それぞれ廃止となり、これを以て学校教練に終止符が打たれ、生徒のゲートル姿も見られなくなりました。

授業は再開されましたが、小麦播種・甘藷掘り・製炭などの作業も行われ、11月6日からの1週間には、援農作業が実施されました。農家の生徒は自家作業を、非農家生徒は親戚その他軍人家族の援農作業を、農家作業のない生徒は学校での作業を行いました。また、9月から翌年1月までは、第一海軍航空廠での後始末の勤労奉仕も行われました。

1945年暮、電力事情が逼迫し、停電が一般家庭にも及びました。また、深刻な石炭不足と連合軍関係の優先運転とで、国鉄輸送は危機に瀕し、列車運行が大幅に削減されました。常磐線ダイヤも12月15日から5割減となり、列車通学生の定期券使用が1946年1月末まで停止されました。そのため、登校不可能な生徒は自宅学習となり、先生方は自転車で巡回出張し、生徒の様子を見て回りました。登校可能な生徒は、真冬の坂道・砂利道を自転車・ペダルを踏んで登校しました。

1946年3月25日、4年修了で卒業、進学・就職をする中学46回生159名の卒業式が挙行されました。1943年の「中等学校令(勅令第36号)」・「高等女学校規程」により、4年間とされていた中等学校の修業年限が、1946年2月23日の勅令第102号により、5年間に戻されていました。この年は、4年修了での卒業も認められていました。

5年生に進級した同級生(中47回144名)をはじめ、在校生たちはこの卒業式で、校歌第4番の「亀城八百」を「亀城千八百」と改めて歌い、46回生を送り出しました。
3月29日、1936(昭和11)年9月25日から校長を務めていた宗光太一郎が、「勉強せよ。責任を持って。着眼点を高くせよ。」との最後の言葉を残して、退職しました。

後年、宗光は、戦中から戦後に掛けての学校の状況を次のように記しています。

「戦時中は職員生徒も戦時色いっぱい塗りに潰されて、阿見にあつた海軍の航空廠に又は水戸線沿線の福原等に交代して徴用工として取られた。宿泊訓練や、教練等軍隊の真似事をやり、又学校では防空壕を作つて、空襲警報が発せられると夜の夜中でも学校へ駆け付け、壕の中で警報解除になるまで避難を続け、御真影を守護したものであります。片方、建築の建前だけを済ませたばかりの講堂は学校工場に当てられ、軍のお手伝をするやうになっていました。」

昭和20年8月15日、いよいよ終戦の詔勅が発せられると講堂に運ばれ備え付けられた機械類は取除かれて、理屈上平和になつたとは申すものの、何からどんな風に始末をつけてよいか全く手のつけ様のない有様で困りました。そのうち進駐軍が到来してその指図に従わねばならぬとか、進駐軍は日本軍と異り、情に冷たいとか、残酷ださうだ等噂が飛来したりして、つまらぬ心配をしたものでした。さういう混乱状態の中で、教育は大切に続けられていつた次第でした。「(終戦当時の学校の状況(『進修同窓会報』第5号(1966)昭和41年6月発行)」)

(注)赤池(木田余東池)

1841(天保12)年に、第10代土浦藩主土屋寅直(1820・1895)の命を受け、幕末の農政学者長嶋尉信(やすのぶ)が、農村振興策の一環として、殿里・真鍋・木田余3ヶ村の入会池として造つたもの。現在の茨城県南自動車学校付近から木田余宝積寺近辺までの地に、北から一番上が殿里池、次が西真鍋池、東真鍋池、その下に木田余の西池と東池、と5つの池が段々に連なり、周辺は松林(終戦直後には土中生が開墾作業に当たった)となっていた。池の水は、滝のように下の田んぼに落ち、木田余宝積寺の脇を流れて、殿里・真鍋・木田余の農業用水として利用されていた。現在は、一番下の木田余東池を残すのみとなっている。



海軍略帽(右)と櫻水章(下)